



浦上コレクション

北斎 漫 画

令和2(2020)年度高知県立美術館企画展

鑑賞の
しおりの



HOKUSAI MANGA

浦上コレクション『北斎漫画』の魅力

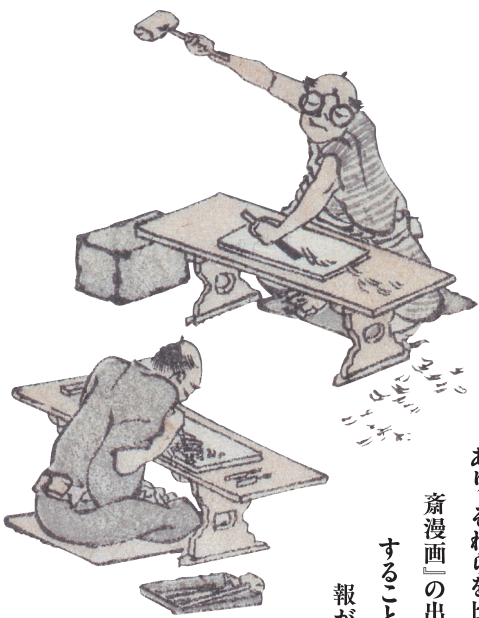
◎文・中谷有里（高知県立美術館学芸員）

『北斎漫画』は江戸後期の浮世絵師、葛飾北斎（1760～1849）の代表作ともいへべき絵手本で、文化11年（1814）から北斎死後の明治11年（1878）にかけての60年以上という、非常に長い期間をかけて出版された北斎のベスト&ロングセラーです。絵手本として同時代の日本の絵師たちに流派を超えて影響をおよぼしただけでなく、ヨーロッパにわたり19世紀のジャポニスムの火付け役となり、しばしば西洋の画家、工芸家たちの着想の源となりました。その造形は現代の私たちが見ても「新しい！」と驚かされる斬新で刺激的なアイデアにあふれています。

今回の展覧会では世界一の質と量を誇る『北斎漫画』のコレクション、浦上満氏のコレクション（浦上コレクション）をご紹介します。浦上氏と『北斎漫画』の出会いが学生時代の1970年、18歳の時のこと。描かれた江戸時代の人々の生き生きとした姿に魅かれての衝動買いだっただろうです。そこから50年以上にわたり『北斎漫画』の収集を続け、現在では1500冊以上にのぼる世界随一と言うべき大コレクションを築き上げ、今もその規模を更新し続けています。

浦上氏がこれほどの情熱を傾けて収集した『北斎漫画』の多彩な魅力については、本パンフレットでも展示室でもご紹介しているとおりますが、もとより全15冊からなる『北斎漫画』を総数1500冊も有するということがどのような意義を持つのでしょうか？

第二に、幅広い摺りの本を有することで出版の歴史が見えてくるという面白さがあります。1点ものの肉筆画と異なり、浮世絵版画や版本は繰り返し摺られます。増し摺りされるにしたがって、時代の状況や読者の需要などを反映して内容に変更が加えられることもあり。浦上コレクションには、各編につき異なる摺りのものが数十冊とあり、それらを比較できるからこそ、『北斎漫画』の出版の歴史を細かに考察することができるといえます。また、報が見えてきます。



もちろん複数の摺りの中から、その絵の出版初期の姿を伝える「初摺り」と思われる本を見出すこともできます。

浦上コレクションの持ち主は、この人！

さらにもうひとつ、浦上コレクションの膨大な版本群には一時は日本を離れ、西洋に渡った本も含まれています。それらの本には出版時の摺りの違いだけでなく、書き込みや装丁の改装など、それを手にしたさまざまな旧持ち主の痕跡が残っている場合があるのです。例えば、本展に展示中の第2編《寄せる波・引く波》にはアルファベットとフランス語による書き込みがあります。こういった本は、ヨーロッパ等の海外で爆発的なブームを引き起こした『北斎漫画』のたどってきた歴史の生き証人でもあります。今回の額装による展示では残念ながらこれらの点についてあまりご紹介できませんが、ご関心のある方はぜひ浦上満『北斎漫画入門』（文春新書、2017年）をご一読ください。

当館では展覧会と併せて、2階のアート情報コーナーにおいて、浦上コレクションを底本とする『北斎漫画』の復刻本や関連書籍も閲覧できます。ちなみに、それらに記述されている本コレクションの冊数をたどると、1986年『北斎漫画』（岩崎美術社）刊行時には500冊以上、1988年『週刊朝日』の北斎漫画特集の際には約600冊、2005年『初摺 北斎漫画』（小学館発行）時には約1200冊、2011年『北斎漫画』（青幻舎）発行時には1400冊を超え、2017年の『北斎漫画入門』発行時には1500冊と年々拡大していくコレクションの歩みを知ることができます。



現在進行形で増えているという浦上コレクション『北斎漫画』の今と、何より『北斎漫画』の版画としての魅力を、当館でじっくりと堪能ください。



浦上 満
うらがみ みつる

1951年東京生まれ。学生時代に『北斎漫画』の魅力に取りつかれ、50年かけて1500冊以上を蒐集。質・量ともに世界一のコレクションとして知られる。東京・日本橋で主に東洋古陶磁を扱う「浦上蒼穹堂」を経営。現在、国際浮世絵学会常任理事、東洋陶磁学会監事、東京美術倶楽部常務取締役。著書に『中国・朝鮮古陶磁の見かた、選びかた』（淡交社）、『北斎漫画入門』（文藝春秋）など。

高知会場のみどころ一

え きん 特集展示「絵金と絵手本」

本展第2会場の一部では絵金蔵（香南市赤岡町）の協力による特集展示「絵金と絵手本」も併せてご覧いただけます。そもそも高知県立美術館で北斎の代表的絵手本『北斎漫画』をご紹介することになった発端は、幕末から明治初期の土佐で活動した絵師、弘瀬洞意（通称・絵金）の存在にあります。絵金は土佐から江戸へ出て、土佐藩の御用絵師、前村洞和に狩野派を学んだ絵師ですが、江戸への遊学からの土産として『北斎漫画』を土佐に持ち帰ったと言えられています。残念ながら絵金の所有した本そのものは現存が確認できません。しかし、『北斎漫画』と絵金の作品を比較すると、確かに人物の形、図像、発想などの随所に、全く同じとまでは言わずとも、響き合う造形を見出すことができます。『北斎漫画』に限らず、絵金が江戸でいわゆる版本や浮世絵を通じて、江戸の町絵師の画風を吸収したであろうことは、研究者の間でも指摘されていますが、今回の特集展示ではぜひ現物とともに両者の呼応を感じていただければと思います。また『北斎漫画』はまさに絵金が絵を学びながら肌身に感じていたであろう江戸の空気を今に伝えてくれる豊かな資料でもあります。江戸後期の人々の生活に思いを馳せながら、北斎と絵金の共演をお楽しみください。

本展会期中、下記の展覧会でも絵金の作品をご覧いただけます。

絵金蔵「手習のすすめ」

絵金自身の習作、また弟子への手本として残したと考えられる白描画を展覧します。

会期：8月4日（火）～10月11日（日）
※月曜日休館（祝日の場合は翌平日）
会場・お問合せ：絵金蔵
高知県香南市赤岡町538
☎0887-57-7117
<https://www.ekingura.com/>

いの町紙の博物館

特別展「吉川染工房の仕事と絵金展」

高知の伝統文化を継承する土佐の匠・吉川毅氏制作の土佐凧やフラフにあわせて絵金の作品を展示します。

会期：8月7日（金）～9月6日（日）
※月曜日休館（祝日の場合は翌平日）
会場・お問合せ：いの町紙の博物館
高知県吾川郡いの町幸町110-1
☎088-893-0886
<https://kamihaku.com/>

もっと
絵金について
知りたい方は…

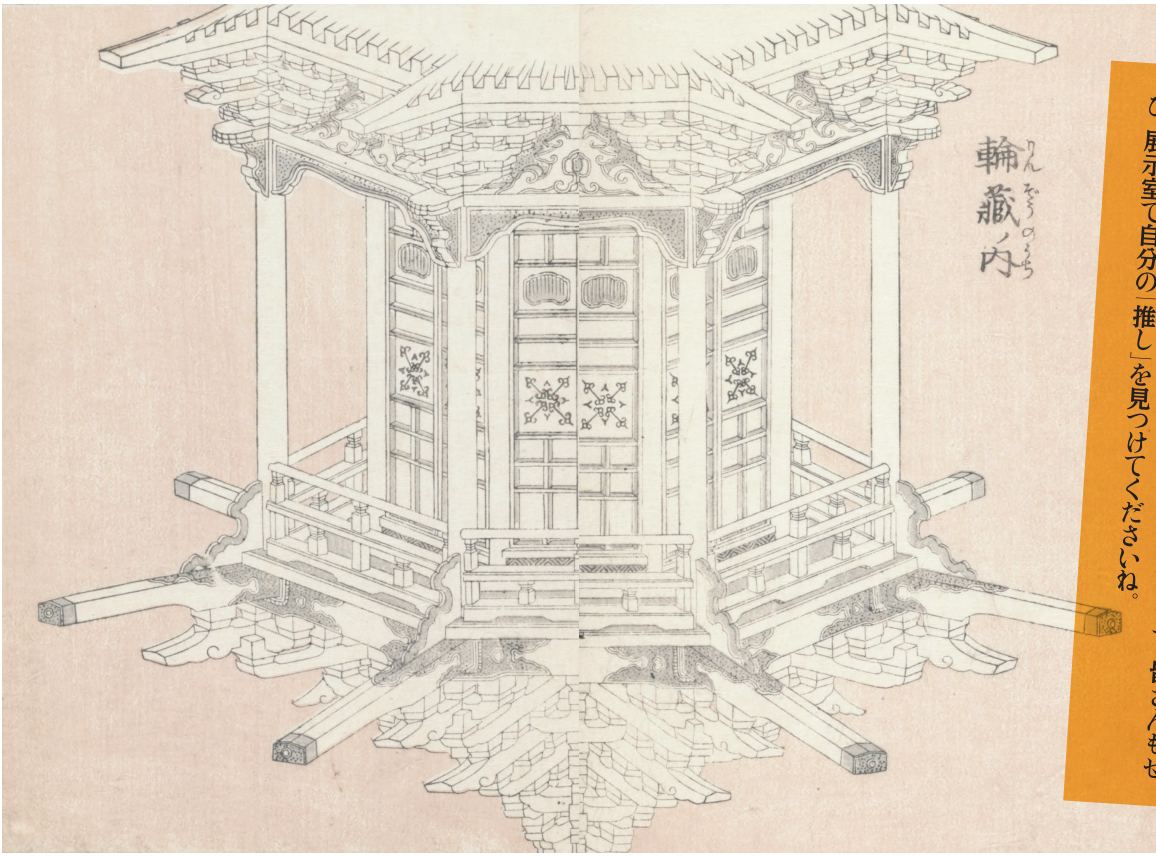




隈研吾 「くまけんご」
建築家 Photo: J.C. Cushman

《輪蔵の内》五編

「輪蔵の内」のテーマとなっているのは斗拱と呼ばれる、建築のディテールの反復である。実は僕自身が斗拱の反復をモチーフとして、いくつかの建築のデザインをした。例えば高知県梹原の木橋ミュージアムである。斗拱はそもそも寸法の小さな木材を使った同じディテールをいくつか反復することで、大きな屋根を支えるという数学的な考え方の産物であり、僕はその数学性に惹かれたのである。北斎漫画は数学性にあふれている。



輪蔵の内



浦上満 「うらがみみつる」
浦上蒼穹堂代表、本展監修者

《狂画葛飾振》八編



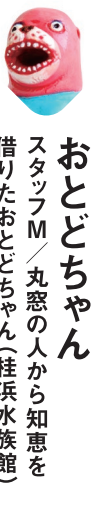
浦上コレクション 『北斎漫画』

「推し」

カット集

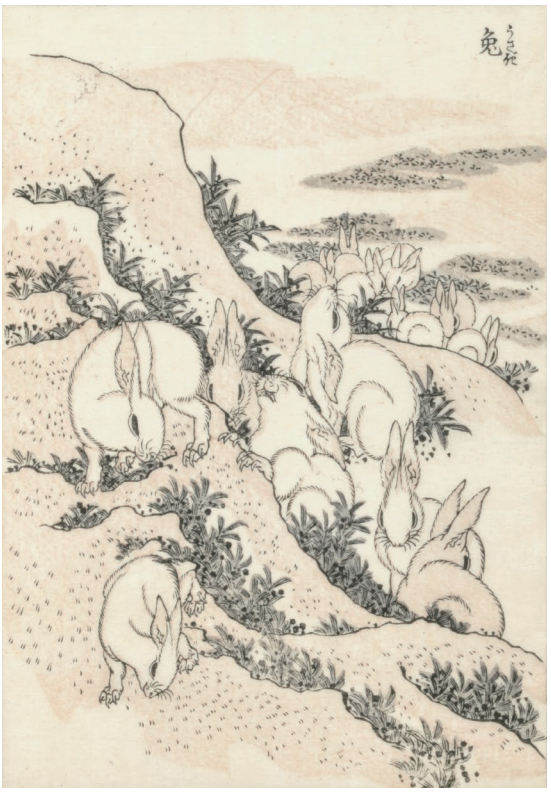
4000点近くの図を掲載している『北斎漫画』には、実に多様な図が収められており、様々な切り口から眺められる面白さがあります。ここではあらゆる分野に携わる方々が「推し」を紹介し、本展に出品されている『北斎漫画』の魅力を探ります。皆さんもぜひ、展示室で自分の「推し」を見つけてください。

《魚介類・亀》初編



おとどちゃん
スタッフM/丸窓の人から知恵を
借りたおとどちゃん(桂浜水族館)

魚類学者の故 木村重先生が『フィッシュマガジン』誌(緑書房刊)で連載しよった「中国伝承奇魚怪魚」にはたまあるか奇々怪々などでもない魚が列挙されちゅう! おとどの勝手な解釈やけど、中国奥地の人が伝え聞いた海の魚とかを、形を変えて後世に残したものでないだろうか?! 北斎漫画では、北斎さんが実際に目にしたがやろう魚やエビ、カニ、貝類とかといっしょに、伝え聞いて絵にしたがやろうな〜って思える生き物もおもしろいって「中国伝承…」に相い通じるものがあるのがじゃないかって考えたらめっちゃ面白い! ロマンちやー! まあおとど、まだ4歳やきあんまり難しいことわからんけどね!



《兔》十五編



竹崎和征 「たけざきかずゆき」
画家 Photo: Ito Akimasa

アルビノかな、2色に赤を差し込まれた様な、獣か怪物かというように描かれた長い目の兎たちの絵。北斎漫画集をばらばらと見かえし、強く惹かれた1点は「兔」でした。例えばこの絵は左下の兎がいなかったら画面はとても整うのではないかと思います。しかしその1羽を描いているおかげで全体のバランスを欠かせ、流れに溜まりを作り、画面は強くなる。この隠れた主役のような1羽のおかげで、東洋的な縦型の構造の流麗さに、僕には何処か西洋的にも感じられるなにかが画面に持ち込まれたように感じました。今の目で今の絵画を見ているような、なんだかとても不思議な、けれど嬉しいような感覚です。実際北斎には西洋からの影響はあったんだろうかなどと想像してしまいます。



《寄せる波・引く波》二編



横尾忠則 「よこおただり」
美術家 撮影: 三浦正博

この絵はクールベの波の絵を思い出させる。この北斎の「寄せる波、引く波」は2枚の絵がひとつ画面に描かれているようでもあり、寄せる波と引く波がぶつかる寸前でもある。ここに描かれているのは2つの波の表情と同時に「時間」である。遠くから近づいてくる寄せる波はまるで動画のように動いて見える。かと思うと先きに寄せた波が、身を翻して今度は後方に戻っていく瞬間である。寄せる波の下にくぐるようにして、再び遠くに去っていく。その両者の描写が全く異なって描かれている。寄せる波は装飾的に描かれるが、引く波は近代的な写実の線画である。ここには西洋と東洋の共生共存がある。

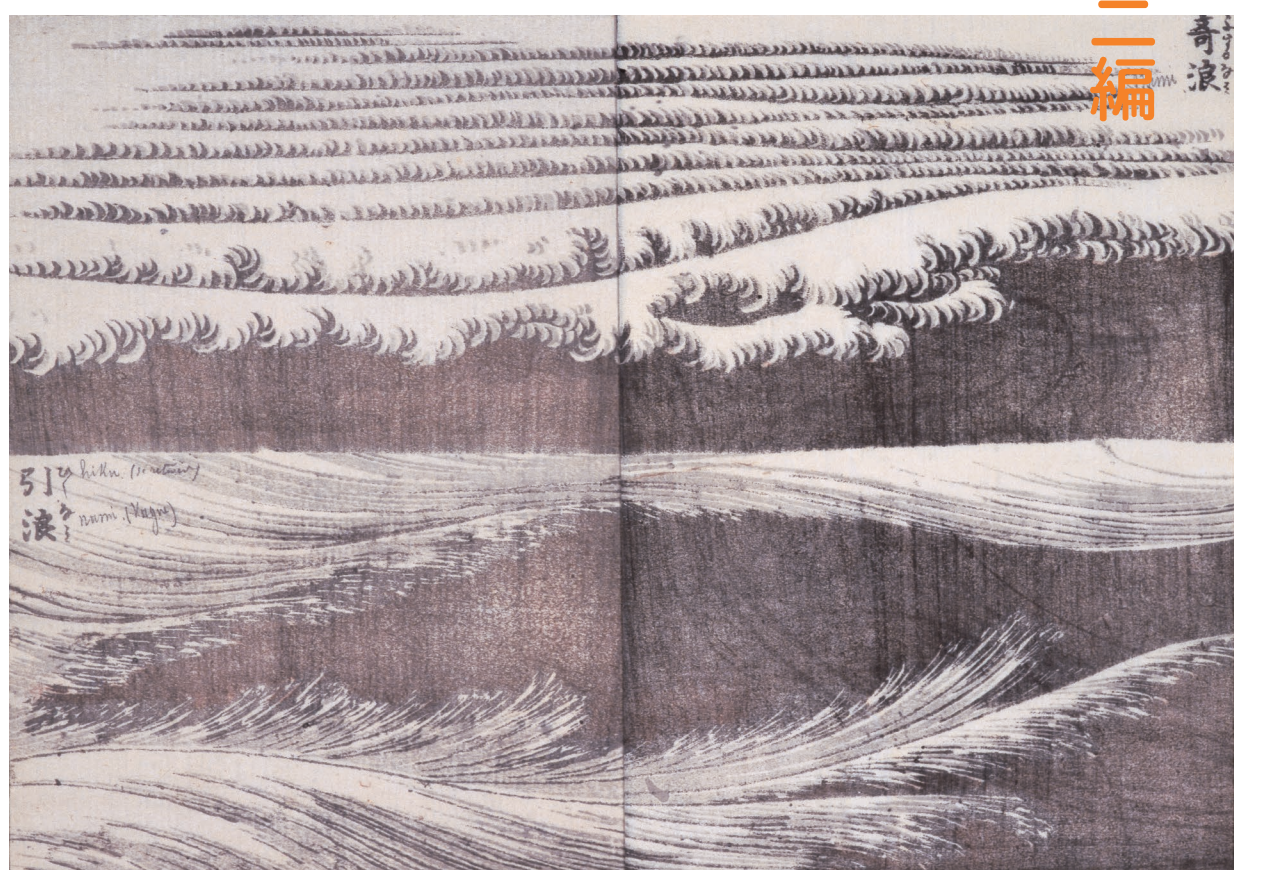


《植物図譜の描きかた》八編



里見和彦 「さとみかずひこ」
元牧野植物園教育普及課長

左からクロユリ、ミヤマエンレイソウ、ナルコユリ(?)。この絵は北斎漫画に登場する花鳥画的な植物の絵とちよつと違う。北斎が没し13年後に生まれた植物画の各手、牧野富太郎の図のように、画面に植物を立体的に配置し、それぞれの立ち姿と、根・茎・葉・花の形を、図解的に描いているのだ。各部位には引き出し線を付け、色の名や、ほかの指示を細かく(しつこく)書き添えているし、左下のクロユリのおしべやめしべの描写もなかなか詳しい。部分的には正確じゃないところもあるけど、流れるような線の勢い、見る者を引き込んでいく線の構成力、「画狂人」と「草木の精」、2人ともえらく長生きしたし、引越したところも似てるかも。



《河童を釣るの法》十二編



中谷有里 「なかつたにゆり」
高知県立美術館 学芸員

煙管をふかす男性の背後に迫るのは、背中に甲羅を背負い、とがった口を持つ生き物、河童。河童は人間の架空の臓器「尻子玉」とると言い伝えられており、この絵では突き出した男性の尻に引き寄せられています。この絵は「釣りの名人」と題された見開きの半分で、画面に書かれたタイトルは「河童を釣るの法」。よく見ると男性は大きな網を用意しており、自身の尻を釣餌に河童を捉える作戦なのでしょうが、表情は油断しきっており見ていてひやひやします。このシニカルな笑いを含む状況設定や言葉選びも、時の文化人と交流し、狂歌に親しんだ北斎ならではの知恵かもしれません。この絵のアイディアは幕末の絵師、河鍋晩斎の鐘馗図の戯画にも転用されています。



※画像タイトルは本展に際して新字体に改めたもの、新たに便宜的に付したのを含みます。

磯部磯兵衛物語〜浮世はつらいよ〜
特別編

北斎漫画

拙者 磯部磯兵衛!

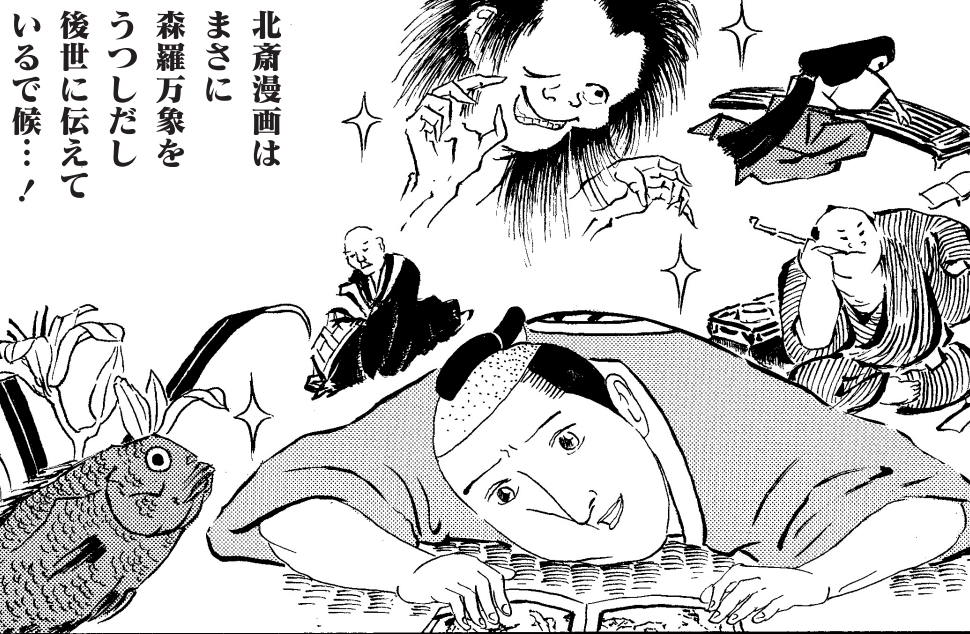
立派な絵師
になるために
今日は
北斎漫画を
見まくるで候!



全十五編にも
わたってここまで
絵の描き方を
細かく伝えた
本など今までに
ないでござる
からなあ…

よくもまあ…
よっぽどヒマだった
んだらうな…
北斎殿!

江戸の人々の生活から
動物 建物 自然現象
さらには幻想的なもの
まで…



北斎漫画は
まさに
森羅万象を
うつしだし
後世に伝えて
いるで候…!



拙者も
神絵師に
なれたか
なあ…?

いや…

お前
ワシの絵…
本当に
ちゃんと
見て描いた
か…?

負けずとも
劣らぬ
かと…

北斎